

疫学調査からみた女性の生活習慣病の実態—婦人科疾患との関連について—

林 邦彦

Summary

女性の健康におけるライフコースを考えると、男性にはない性成熟期を考慮した生殖機能因子や生殖的加齢因子をモデルに含めなくてはならない。そのため、閉経前の若年時からの健康情報を収集蓄積する疫学研究が必要となる。そのような前向き女性コホート研究である日本ナースヘルス研究(JNHS)と、JNHSを含む国際コンソーシアムInterLACEから報告された分析結果を紹介しながら、わが国の女性を対象にした疫学調査からみた生活習慣病の実態、特に婦人科疾患との関連について述べる。

Key words

ライフコース疫学
生活習慣病
生殖機能関連事象
女性医学
日本ナースヘルス研究

女性の健康における
ライフコース疫学

英国医学研究会議(MRC)の環境疫学部門(現ライフコース疫学部門)の疫学者 Barker DJ らは、1980年代後半に、出生時低体重が成人期での高血圧症や虚血性心疾患などのリスク因子となっていることを疫学研究から示した¹⁾²⁾。胎児期・乳幼児期で低栄養の環境にあると、それに適応するためエネルギー代謝や内分泌の調節を行うとともに、儉約的なエピジェネティックな遺伝子発現での調節が行われる。しかし、その後のライフステージで栄養状態が好転すると、これらの適応は過度なものとなり、成人期の高血圧症や耐糖能異常などを発症しやすくなるというメカニズム・モデルは、Barker 仮説や生活習慣病胎児期発症起源説(DOHaD 説)として知られる。このような胎児期・乳幼児期から成人期にいたる健康事象をライフコースとして捉えて検討する疫学分野を、ライフコース疫学と呼んでいる。

女性の健康におけるライフコースを考えると、胎児期・乳幼児期の要因のみでなく、男性にはない性成熟期を考慮した生殖機能因子や生殖的加齢因子をモデルに含めなくてはならない。**図1**は、豪州クイーンズランド大学ライフコース疫学教授の Mishra GD らが提唱する女性の健康におけるライフコース模式図を改変したものである³⁾。各ライフステージでの生活保健習慣といった環境因子とともに、それまで経験してきた生殖機能関連事象が後年の健康に影響する。ま

Kunihiko Hayashi

群馬大学大学院保健学研究科教授